



仏教のこころを求めて

あまりの酷暑に、もう秋は来ないのではないかと思わせた夏が去り、自然は律儀に秋を運んで来てくれ、お彼岸が巡ってまいりました。

普段は一向に宗教に無関心な日本人にも、お彼岸やお盆と聞くと何らかの宗教心をよみがえらせ、全国各宗派の仏教寺院でも「彼岸法要」が勤まり大勢の信者がお参りされます。お盆やお彼岸は習慣としては揺るぎなく定着しています。しかしその一方で、本来の意義から離れ、自分たちの先祖の「お墓まいり」こそが仏さまに対する最上の礼儀（供養）だと思われてきている方が多いのも現実です。

お彼岸は、ご存知のように年二回、春分の日と秋分の日「お中日」をはさんで一週間をいう仏教習慣です。本来この期間は、仏道修行のために設けられたものでした。なぜなら、私たちの日常は、世俗のことに心を奪われ、目先の日暮しに追われており、たとえそれが順調に見えていても、また反対に困難に直面して苦悩する暮らしにあっても、なかなか平常心ではおれません。私たちは自分を見失いがちなのです。

お彼岸は、そんな我が身を見つめ直す仏縁として、「せめて、気候のよくなったこの時期だけでも仏法に耳を傾け迷いに気づいて

くれよ…」と、今生かされて生きているこの「私」にこそ仏法を聞いてほしいと、先人が遺して下さり、綿綿と守り伝ええられてきた、尊い仏縁であることを忘れてはなりません。

彼岸とはあの世をいうのではありません。「迷いの世界から悟りの世界へ至る」という意味であって、「あの世の先祖を供養する」と思っで行うのは明らかな大きな間違いなのです。

* * *

私たちが追い求める「安心」「楽（幸せ）」、これは宗教にとっての大きなテーマですが、「あれを達成した」「こんないい家族をもってる」「自分は健康で若々しい」など、そういう我執の含まれる幸せは永遠ではなく、危うく、いつも失うのではないかという不安や猜疑を生む苦悩の種となります。仏教は、執着を捨てよ、今あるそれで安心すればすればいいじゃないか、「いのち」というものの本質は、最終的にはどんな人間にも平等で変わらないものだよと教えています。幸せは追求すればするほど果てしない不満につながるものですが、逆に安心は今ある自分できちんと肯定してくれるのです。それは現実を無視して笑い飛ばせというのではありません。

親鸞聖人の「和讃」の中に「如来の遺弟悲泣（ひきゅう）せよ」という言葉が出てきます。

辛く、悲しい時には泣きなさい、泣いていいんだよ、という意味だとお味じわいしています。

「泣く」という行為には、声を出して泣くこと、また人知れず心で泣くこともあるでしょう。泣いて何か力があるのか…、そこには、自分を含めたあらゆるものが「無力」であることへの気づきがあります。いくら愛おしく思っても思うようにいかない、思うように助けることができない、という「無力」です。ある意味においては宗教も「無力」ですが、そのことを認め、知るらせてくれるのは宗教しかないのです。

親鸞聖人はそのみ教えの中で、はっきりと人間の限界を認め、それがゆえに、他力の教え「すべて苦しむ衆生をもらさず救えなかつたら、私は仏にはならない」と誓っていつも手を差し延べて下さっている阿弥陀さまの大慈悲に恵まれてあるから安心せよ、と導いて下さっているのです。そのみ教えには、お浄土に往くだけではなく、往って生まれて仏となって、再び戻ってきて人々を迷いから救うはたらきをするという明るい世界が開けています。

お彼岸は、亡くなられた大切な人の、その尊いはたらきに気づかされるときなのです。そこに仏教国日本の大らかさと穏やかさが育まれていたのです。本来の意味を知って仏縁を法縁にしたいと願っています。合掌

奏庵法座 秋季彼岸会

日時
9月26日(土)
午前11時より

「真宗宗歌」
阿弥陀経
法話
ご文章拝読
「恩徳讃」
～*～
おとき

空気が夏のものでなくなり、気がつけば初秋の陽に庭のススキの穂が光っていて、足元に目をやれば、彼岸花が毎年咲く場所にちゃんと伸びています。皆さまにはお変わりなく厳しい夏を乗り越えられたでしょうか。

下半期最初はお彼岸の集いです。永代経法要に続いてですが、法要にお参りできなかった方、またお参りくださった方も続いてお参り下さい。お待ちしております。



おことわり

住職、この度入院加療が必要となり、いましばらくは治療を最優先に過ごさせていただきたく存じます。ご法事、お葬儀などの法務は、今まで通り、若院と衆徒（龍溪寺所属の僧侶）が変わらずお勤め、お参りさせていただきますので、どうぞ遠慮なくご依頼下さい。

皆さまにはご心配をおかけし、若干のご不便をおかけすることもあるかと申し訳なく存じますが、ご理解とご協力をいただきますようお願い申し上げます。

合掌

仏教の智慧

《災難に遭うときは》

災難に逢う時節には
災難に逢うがよく候
死ぬる時節には
死ぬがよく候
これはこれ、災難を
のがれる妙法にて候

良寛の、「治る病もあるうが、治らぬままに救われる道がある」、病にありながら、「誰もが気づかぬままにいつかは病になっている」そう気づいたときに、救いの道が開けてくる。災難にある方と共有したい深いことばです。

この度の大雨による大水害でも発令された「ただちに命を守る行動をとって下さい」、この警告を聞くようになったのは大震災がきっかけだろうか。内容の深刻さに比べると、あまりにも緊迫感に欠け、漠然とした血の通わない表現だ。何が？、どこから？、どうやって来る？、これでは自分がどんな危険に迫られているのか判らない。■勧告や警告、命令を発令しても、全員を監視、強制してまわるのは不可能だから、行動に個人差があるのを責めることはできない。ましてや、行動を取りたくても、からだが不自由な家族がいたり、家族同然のペットを置いてはいけないという躊躇が行動を遅れさせる情は理解できる。それが人間だろう。もっと早く避難していれば、屋根の上で震え、電信柱につかまり、絶望感に襲われながら救助を待たなくても済んだかもしれないが、あの時のあの行動が、あの人たちの置かれた現状の中では「ただちに命を守る行動」であったことは間違いない。■気が付いた時には遅かった。人生においてある日突然そんなことが降りかかったとしても何ら不思議ではない。それは、あの時こうしてたとしても起こったかもしれない。手遅れは「敗北」と「不幸」の極みのようにうつるが、それがなければ「奇跡」というドラマも生まない。助かったとしても後々「あのとき死んでいれば…」と、それ以上の苦難に遭うかもしれない。それが進歩を生んできた。■思いがけない災難は、人間のはからいで思うようにできるものではないことを教えてくれる。色々な困難の中で命を守ろうとする姿は、人命救助や医学の進歩に役立ち、目の前で流されていく人、助けを求め苦しむ人を救えなかったという経験は人を謙虚にさせ、何事も克服できるというのが奢りであることに気づかせる。■インフラを整えるのも大切、専門家の分析も必要だが、災難は手を替え品を替えやってくる。そんな中で命を守るとは、生きている限り生きようとする事だ。その一息一息を可能にする行いが「ただちに命を守る行動」なのだと思う。 Norimaru